九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『封神演義』をめぐる明末士人の出版活動と読書態度

岩崎，華奈子

https://hdl.handle.net/2324/4474910

出版情報：九州大学，2020，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式６－２）

氏　　名	岩崎　華奈子
論　文　名	『封神演義』をめぐる明末士人の出版活動と読書態度
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　静永　健 副　査　九州大学　講師　井口　千雪 副　査　九州大学　准教授　藤井　倫明 副　査　九州大学　准教授　川平　敏文

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文の提出者岩崎華奈子（以下、提出者と称す）が取り組んできたのは、中国古典小説の一つ『封神演義』（全 100 回）である。いわゆる殷周革命（武王伐紂故事）を舞台に、あまたの神仙妖怪たちが戦闘を繰り広げる長篇作品である。その知名度は現在の中国でも高く、主に子供向けに書かれた簡略な読み物や漫画、そしてテレビドラマや映画等にも頻繁に取り上げられ、日本や韓国にも多くの愛好者を有している。

しかし一方、明代の原作に対する本格的研究はというと、上述の世間的人気が言わば夾雑物となるためか、版本や語彙に関する地道で着実な研究が少なく、そこに一歩足を踏み入れた途端、あたかも五里霧中の杣道を進むが如く、難解な問題が山積していた。

その一つが作者許仲琳の問題である。なべて古典小説の作者とされる人物は、正史等の確実な記録に乏しく、更にはそのような活動が世に知られぬよう、実名を避け、筆名等の虚偽の呼称をかたることが多い。許仲琳の場合も、その署名に冠する「鍾山逸叟」の四字から、南京在住の無位無官の人物だとされるだけで、その人物および成立年代に関する問題は、幾つかの憶説はあるが、いずれも根拠資料に乏しく、解明には至っていなかった。

だが本論文の提出者は、日本に所蔵される現存最古の版本を手始めに、中国やアメリカ等各地の明清刊本を全面的に調査。その結果、最古本にのみ付される序文の筆者「李雲翔」なる人物と、その後の各本に「原序」と銘打たれて掲げられる「周之標」なる人物に着目して研究を進めていった。この着眼点は素晴らしく、果たしてこの調査結果をもとに、前者李雲翔は、明末の南京において家塾の教科書や妓楼での流行歌曲集、書画の名品図録等を編集・出版し、それを生業とする著名人であったことがわかった。同じく後者周之標も、こちらは蘇州において数多くの書籍出版に携わった人物であることが判明した。そして李・周双方の交友関係を辿ると、当時江南地域の出版界における重鎮的存在馮夢龍との関係も明らかとなったのである。

次に、清代の刊本の一つ「徳聚堂本」については、提出者による精緻な本文調査の結果、この書肆が、南京と蘇州のみに留まらず、更に南方の福建省にも拠点があったことが判明し、近年、中国の書誌学研究において話題となっている近世出版業者の地域連携について新たな資料を提供している。しかもこの徳聚堂本が依拠した版本は、現存最古の版本（内閣文庫本）よりも、更に古いテキストに基づいている可能性が見えて来た。

最終章は、以上の論述を承けての『封神演義』の内容展開に関する詳細な分析である。この小説の特徴は、新勢力の周と旧勢力の殷との神魔戦争が、もともと宿命（天命）によって勝敗が定まっているこ

と、しかし、たとえそうであったとしても、敗勢の殷側の戦士たちはいずれも熱烈な情義によってこれに抗ってゆくところに、極めて人間的な哀愁が感じられる部分である。この小説が今なお人気を博し、また一方で低く評価される所以でもある。しかしこの宿命と情義の衝突は、提出者の如上の考察を総合すれば、この小説の当時の主たる読者層が、科挙の受験生たちを第一の読者としていることと見事に符合しよう。しかも明朝末期の腐敗した中央政治の状況に鑑れば、この小説は、当時の若い知識人たちの苦悩や焦燥、そして未来への不安感を実に巧みに汲み取った作品とも言える。従来の「子供向け二流作品」という偏見が、本論文の丹念な考証によって見事に覆されたのである。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものと認めるものである。